

古典・生物基礎 合科授業



カゲロウについて

- 節足動物門・昆虫綱・カゲロウ目に属する昆虫の総称。
- 昆虫の中で最初に翅を獲得したグループの一つであるとされている。
- 幼虫はすべて水生。不完全変態であるが、
 幼虫→亜成虫→成虫
という半変態と呼ばれる特殊な変態をし、成虫は軟弱で長い尾をもち、寿命が短い。

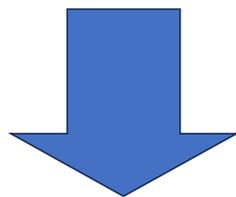


モンカゲロウの幼虫



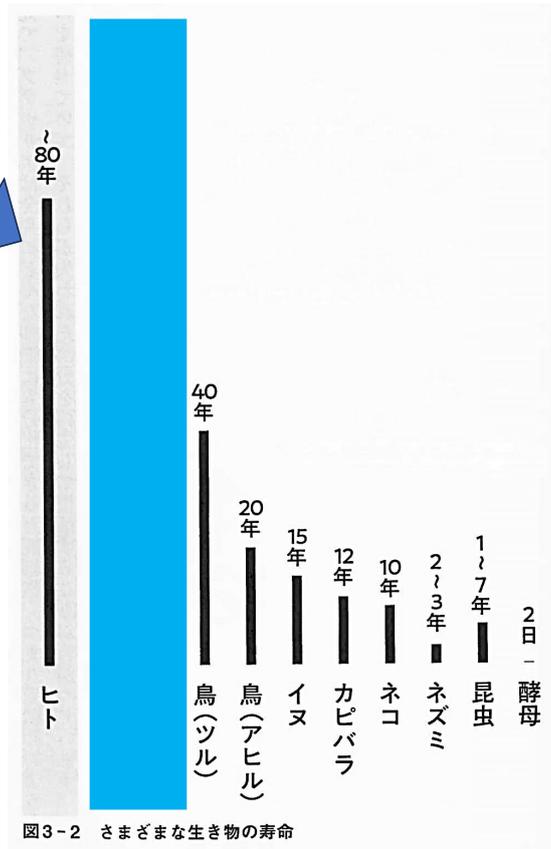
モンカゲロウの成虫(成虫の期間は2~3日)

世は定めなきこそいみじけれ
[人の一生は永遠でないことが素晴らしい]

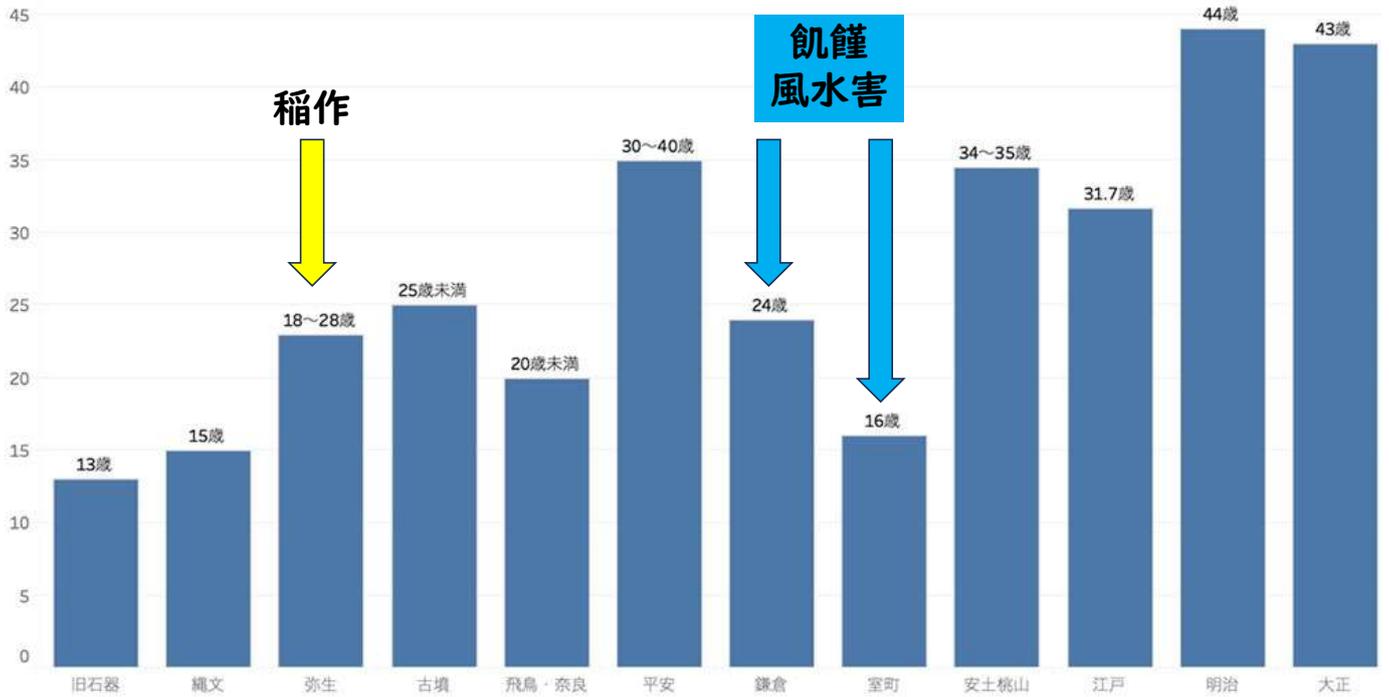


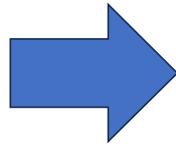
現代生物学ではどうか??

ヒトが最も
長い寿命



日本における平均寿命の推移

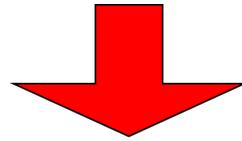




- 変化 (変異)
- 選択 (死, 絶滅)



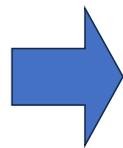
進化の加速



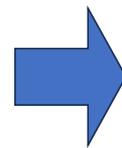
多様性の形成

古い生命
の死

(絶滅)

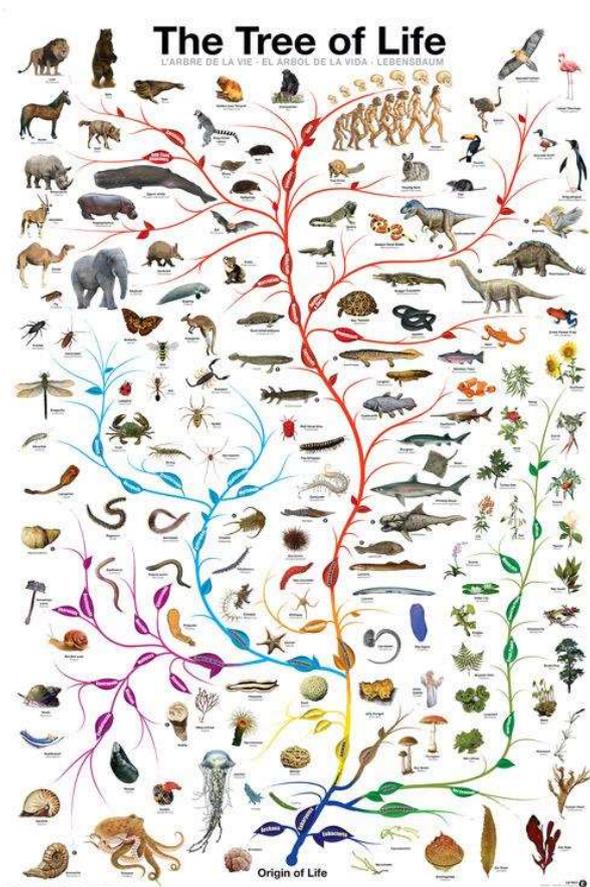


分解



新しい生命
の誕生

(再生)



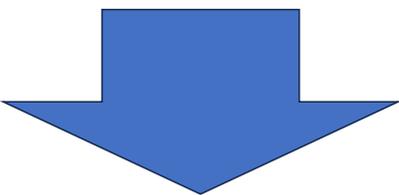
生物の系統樹 ～死と再生～

多様な生命へ

現代生物学においても…

世は定めなきこそいみじけれ
[生命は永遠でないことが素晴らしい]

なぜなら



「死」によって多様な生物(生命)が
生まれ続けていくから

『徒然草』

世は定めなきこそいみじけれ

永遠ではない

||

完全ではない

日本人の感性・思想

Q. 君たちはどう思うか？

不完全なもの・完全なものに対する
自分の考えをまとめてみよう。

徒然草

作者

時代

ジャンル

日本の古典の三大随筆（

）（

）（

）

第七段

あだし野の露 消ゆる時なく

墓地

のみ

住み果つる

習ひならば、

習慣であるならば、

鳥部山の

煙

立ち去らで

火葬場

ないで

いかに
どれほど

ものあはれも

なからん。

ないだろう

世は定めなきこそ

いみじけれ。

すばらしい

命あるものを

見るに、人ばかり

久しきはなし。

見ると ぐらい

かげろふの タベを 待ち、

ぬも、あるぞかし。

ない場合もあるよね

夏の蟬の

春秋を 知ら

つくづくと 一年を暮らすほどだにも ことよのう のどけしや。

ことでさえ この上なく

飽かず 惜しと

思はば

千年を

過ぐすとも

一夜の夢の

心地こそ

せめ。

満足できず

がするはずだ

○あだし野

京都市北西校外の墓地。今も念仏寺が有り、墓地の代表的な名称である。

○鳥部山

京都東山にある火葬場。

キーセンテンス

考え方

九十三段

死ぬのが嫌なら、今ある命を愛するべきなんだ。命ある喜び、これをたのしまないと
いけないよ。

兼好が好きな話Ⅱ愚かな人の話

五十二段

仁和寺の子どもが、お坊さんになる記念として、みんなが集まって宴会をしたんだ。酒に酔ってふざけているうちに、一人の坊主が、脚のついた鉄の鼎(かなえ)を頭からかぶろうとしたけれど入らないので、鼻をおして平らにして、むりやり顔を入れて、おどったんだ。そこにいた人は、そりや面白かった。

しばらく踊った後、かなえを抜こうとして、いっこうに抜けない。みんなでどうしたらいいか、困ってしまった。あれこれしているうちに、首の周りが傷ついて、血が流れ、顔が腫れ、坊主の息が詰まった。かなえをわろうとしたんだけど、鉄だから割れるはずはないでしょう。鼎がががんと響いて、かぶっている坊主はたまらないわけ。

そこできなえの三本足に服を掛けてかくし、手をひっぱって、杖をつかせて、京の医者のところへ連れて行ったら、道で会う人々が、怪しんでじろじろ見るんだ。医者へ行って向かい合っている様子は、そりやへんなものでさ。坊主がしゃべっても、声がこもって何を言っているのかわかんない。医者は、「こんなのは医学書にも書いてないし、どうやってなおしたらいいのか、わからぬ。」と、さじを投げて、仕方なく仁和寺に帰った。友人や年老いた母が枕元にきて泣いて悲しむけど、当人は聞こえているのか、どうか。

こうしているうちに、ある人が「耳や鼻はなくなっても、死ぬよりはましだから、ちらまかせに引っ張ろう」といって、わらを首の周りに入れて、首がちぎれるばかりに引っ張ったら、やっとなげたが、耳と鼻がとれて、その後穴があいちゃった。

この坊主は命拾いしたが、その後長くわずらっていたよ。

徒然草の考え方

「徒然草」は、人が常に願う「や」「から」からは、充実した生活や人生はなかなか生まれにくいことについて、分かりやすく書かれた初めての随筆である。言い換えると、吉田兼好は日本人の感じ方や考え方を、わかりやすい言葉にした初めての人である。

第七段で一番いい一文は「世は定めなきこそいみじけれ」であり、それは、
「世の中は
でないことが
」という意味である。

不完全などないのだから、「」を肯定して生きる方が良いと考えている。
不完全であるなら、不完全なままで生きた方がいい。格好悪くても、そのままの自分を大切にしたい方がいい。完全である夢を捨てて、不完全なままで歩け、と伝えている。

そして、限りある人生の中で人が一心に生きるからこそ、より良いものになる。
だから、「徒然草」には、不完全で愚かな人の話も多い。

もつと言うと、作者は、愚かさを嫌いではなかったようだ。

作者が一番、嫌ったのは、自分の利益ばかりを求める人間たちである。これは、鎌倉末期に、権力のために戦いに明け暮れる戦国の世相を、生で見た人の実感であっただろう。

□徒然草一段

つれづれなるままに、ひぐらし、こころにうつりゆくよしなしごとを

そこはかとなくかきつくれば あやしうこそものぐるほしけれ

相互評価表

発表者 ()

() 年 () 組 () 番
 氏名 ()

一言コメント	内容			形式		観点
	⑤	④	③	②	①	
	興味を持てるか	理由は明確か	意見が明確か	発表の姿勢	声の大きさ	
	A ・ B ・ C ・ D	A ・ B ・ C ・ D	A ・ B ・ C ・ D	A ・ B ・ C ・ D	A ・ B ・ C ・ D	評価
						/20点

A : 4点 B : 3点 C : 2点 D : 1点